同窓会会報

高知県立大学看護学部

第22号
令和3年3月31日発行
〒781-8515　高知市池2751-1

ごあいさつ

同窓会副会長　中野綾美

池キャンパスから眺める山々は、満開の山桜で桜色になり、春が来たこと、新年度が始まることを実感しています。会報22号をお届けする時期となりました。看護学部同窓会は、令和3年3月に82名の卒業生、16名の修了生を迎え、会員2,362名となりましたことをご報告いたします。

同窓会の皆様におかれましては、新型コロナウイルス感染症による様々な影響に対応され、感染予防対策を継続しながらの新しい日常に取り組まれていることと思います。大学においても、学生と教職員が協働して、コロナ禍で健康・安全を守ること、新たな教育方法を活用して学びの権利を守ること、学生生活を豊かにすることなどに取り組んでまいりました。同窓会の皆様には、学生の活動支援、就職支援、給付型特別奨学金、緊急奨学金貸与など、多くのご支援を頂きました。学部や大学院の実習・研究についても、学生が看護実践能力・研究能力を身に付けることができるよう、学生を受け入れて頂き、様々なご支援を頂きました。心から感謝申し上げます。学生は、皆様のご支援を頂き、不確かさの中で忍耐強く、工夫しながら、新たなことにも挑戦し、困難な状況を乗り越えています。今年度は、学部生の看護研究発表会、大学院生の学位論文発表会を対面と遠隔を併用したハイブリッドで実施しました。野嶋佐由美学長に式辞を賜り、看護学部・看護学研究科の学位記授与式を池キャンパスで執り行うことができました。4月には、全国各地から新入生をお迎えし、感染予防対策を徹底して、入学式を執り行う予定です。

同窓会も新たな方法を工夫しながら、全国に広がる同窓生のネットワークを強め、情報交換や交流を活発にしていきたいと考えています。会報22号では、コロナ禍で活躍されている同窓生、同じ職場で看護を実践している同窓生、新卒の同窓生、幅広く活躍されている修了生の方々の声をお届けします。7月17日(土)には、高知女子大学看護学会との共催で講演会を、対面と遠隔のハイブリッドで開催する計画です。コロナ禍は続きますが、逞しく、楽しむことを忘れずに、歩んでいきましょう。

主な内容

① 同窓会副会長ごあいさつ
② ようこそ先輩！
③ 先輩の職場は今
④ 幅広い領域で活躍する修了生
⑤フレッシュに活躍する卒業生
⑥看護学部は今
⑦温故知新

ようこそ先輩！
コロナ禍で活動されている先輩方

田鍋　雅子さん　（38期生・修士13期生・博士18期生）
高知県・高知市病院企業団立高知医療センター　看護局長

2020年は、世界中がCOVID-19に翻弄された1年だったと思います。大変な1年ではありましたが母校県立大学から心強い、また、心温まるご支援を頂き、改めて同窓生のつながりに支えられた1年でした。

私の勤めている高知医療センターは、県の感染症指定医療機関の一つで、県下唯一の中等症以上の患者を受け入れる重点医療機関として、これまでに260名のCOVID-19患者に対応してきました。ちょうど池キャンパス共用棟のテラスが見える位置に感染症病棟（一種2床、二種6床8床）があり、こちらの病棟で対応を開始しました。急激な患者数の増加に対して、感染症病棟の8床から、同じフロアにある結核病棟20床、一般病棟30床（全室陰圧管理）へと病床を転用して対応するとともに、病棟看護師の増員、そのための方針決定を行ってきました。重症患者発生の際には、急遽、救急の受け入れを縮小して、クリティカルエリアの看護師を感染症病棟に配置しました。三次救急に対応する当センターにとっては、重大な判断だったと思います。ですが、判断に迫られた当時は、2ヵ月近くの勤務が続いていた状況に加えて急激な患者数の増加と重症化、感染への不安から、看護師のストレスは最大の状態でした。クリティカルエリアの看護師の配置により、感染症病棟の看護師達は支援が得られたこと、患者への対応力が向上したこと、協力して第1波を乗り越えたことなどにより、自信を得ていきました。実際、メンタルヘルスを考慮して配置転換を行った看護師も数名いますが、感染症病棟での勤務を希望してくれた看護師もいて、ありがたいことにコロナ対応による看護師の退職はありません。

大学の各学部・センター、先生方からの心温まるメッセージやキャンドルメッセージ、いけあいボランティアグループの学生さん達より、応援メッセージをいただきました。県立大学と当センターが結んでいる包括的連携事業を通して、共同研究にも取り組んでいます。感染症看護では、看護師としてのジレンマもあり、ネガティブな表現になりがちですが、COVID-19患者の看護について実践発表としてまとめるなど経験を自信や達成感といった成果につなげる取り組みも行っています。まだ終息は見えませんが、組織として不確実性の高い状況であっても多職種で協働しながら乗り越え、今後も組織の成果や成長に結びつくように看護管理者として対応していきたいと考えています。同窓生のつながりとご支援に、心より感謝申し上げます。

高知医療センターから見た紅葉祭時の医療従事者へのメッセージ

岩井　由里さん（学部49期生、修士13期生）
高知県立幡多農業高等学校　養護教諭　未来ある子どもたちの“楽しい毎日”を取り戻すために

大学を卒業し、高知県に養護教諭として採用されてから18年が経とうとしています。その間には、不登校や問題行動など子どもにかかわる課題の他、貧困や虐待など学校現場はその時代の社会情勢を反映した健康課題に対応を求められてきました。ですが、昨年度末からの新型コロナウイルス感染症の脅威はそのどれも上回るもので、経験したことのない手探りで奔走した一年を終えようとしています。

全国一斉の臨時休校が始まったころ、各校で養護教諭は管理職と共に感染症対応マニュアルの作成、日々の消毒、健康観察や有症状者への対応の準備におわれました。対応しようにもマスクもエタノールも足りず、逆に情報はあふれてどれが正しいのか分からない。また、“子どものいない学校”は非常に淋しく、1校に1人の専門職種（高知県では1人で小規模2校兼務のことも）ということがこれほど心細かった時はありません。しかし、この危機を乗り越えられたのはやはり人とのつながりでした。県立大学の同窓生同士で、相談や情報共有したり、近くの学校の養護教諭同士で連携を取って一緒に考えたり…。校内では一緒に衛生材料を探してくれたり、激務に気遣ってくれる仲間もあり、人とのつながりがこの苦境を乗り越える支えとなりました。

子どもたちの成長に、学校での集団でのかかわりは欠かせません。授業だけでなく、休み時間に友達と遊ぶこと、一緒に給食を食べること、力を合わせて頑張る行事や部活動。その全てが制限を受けてしまう事態に、養護教諭は子どもたちの生活の中に検温や手洗い、距離の確保などの新しい生活様式を浸透させ、いつもの活動が可能な範囲で続けられるよう奮闘してきました。現在も日々の衛生環境管理の徹底や、様々な手法での保健指導を重ね、子どもたちが自分自身を守れる力を育成しています。

ただ、国民みんなで感染症対策を行った結果、インフルエンザをはじめ各感染症の発生が減ったのも事実です。冬場にマスクをしましょう、予防接種をしましょうと何度も呼び掛けても関心が薄かった過去が嘘のようで、これからは自主的に選択してくれる人も増えてくると思います。関心が高まっている今がチャンス！と個人衛生や健康管理能力の育成に力を入れていきたいと思います。

私たちはやはり子どもたちの笑い声あふれる学校で勤務したい。子どもたちの楽しい毎日、“当たり前の日常”を守るために私たちにできることを、学校保健の可能性をこれからも追求していきます。

ようこそ先輩！
コロナ禍で活動されている先輩方

藤原　房子さん　（修士12期生）
公益社団法人高知県看護協会　会長

コロナ禍における高知県看護協会の取り組み

　昨年から感染が拡大している新型コロナウイルス感染症において、同窓会の皆様は、保健・医療・福祉・教育等の場で、ご活躍のことと存じます。
　私は、修士12期生として学び、現在は、高知県看護協会で高知県の看護の代表として様々な事業に取り組んでいます。高知県看護協会は、日本看護協会との連携のもと、看護職の質の向上と安心して働き続けられる環境づくりの推進を主な目的としています。新人からジェネラリスト、教育者、管理者等を対象とした研修を企画し、年間約10,000人の看護職が研修を受講しています。コロナ禍の中、研修を実施するにあたり、国や県の指針をもとに、「3密」を避けるよう、受講者の人数制限、会場のレイアウト、換気などの感染対策をとってきました。また、オンライン研修に必要な機器の整備をし、集合、オンラインなど、講師・受講者の安全を考慮しつつ、研修目的が達成できるよう工夫してきましたが、密になる演習ができないことが課題となっています。
　日本看護協会との連携では、新型コロナに関する情報共有やホームページでの情報発信、また、感染防護具の不足が深刻な状況の中、寄贈されたサージカルマスク等のPPEを県内医療機関等へお送りしました。さらに、コロナ禍の中、看護職の不足が課題となっています。当協会には、無料職業紹介事業所「高知県ナースセンター」が設置されており、コロナの宿泊療養施設、健康相談センターに多くの潜在看護職を派遣しています。さらに、潜在看護職の現場復帰を支援するため、復職支援研修を開催しています。
　また、「新型コロナウイルス感染症の対応にあたる看護職応援プロジェクト」として、医療等の最前線で働く看護職へのメッセージを募集し、高知県知事様、室戸市長様はじめ、500名以上の皆様から、感謝や激励、温かいメッセージをいただきました。メッセージは、協会会館に掲示し、当協会ホームページや広報誌で公開するなど、コロナ禍で頑張っている看護職の皆様へ届けることができました。
　昨年は、コロナに翻弄されましたが、感染対策やオンラインでの研修等、新たな学びも多い1年となりました。まだまだコロナの収束が見通せない中、令和3年度も昨年の学びを活かし、高知県の看護の発展、質の向上のために取り組んでいきたいと思います。

野田　真由美さん　（34期生）
高知市保健所

　令和2年2月28日に高知県第1例目の感染者が高知市で発見されほぼ1年。私は感染症担当課ではありませんが、保健所におけるコロナ対応についてお伝えさせていただきます。
　2月には、高知県・高知市合同の「新型コロナウイルス健康相談センター」が設置され、市の保健師も交代で出務しました。帰国者・接触者外来が開設されると、病院から検体を回収し、県の衛生環境研究所へ搬入。検査結果を受けて病院へ結果を返し、陽性患者が出れば患者の入院調整、積極的疫学調査の実施、濃厚接触者の選定、検査の繰り返しでした。数珠つながりに次々と陽性者が確認されていく中で、担当課のキャパシティを超える業務量の増大と、怒涛のように押し寄せる市民の不安や健康相談を前に、現場は混乱し疲弊していきました。それでも容赦なく新たな感染者の発見は止まらず、月の残業時間は100時間を超えていました。12月からの第3波では、1日に患者発生数が20人を超える日が続き、宿泊療養所も開設され、患者搬送や入所・退所、自宅療養者の管理等、更に業務量が増えました。人的応援体制としては、課内総動員→保健所全体→全庁的な調整と、状況に応じて保健師や事務の応援体制が整備され、まさに災害対応そのものでした。
　感染症担当保健師は、「大変なのは自分だけじゃない」その思いに支えられた1年であったと。まずは、ともに仕事をする上司や同僚。次に、毎日のようにやりとりする関係機関や医療機関の方々。患者さんの「保健所の人も大変でしょう。頑張って。」その言葉にも支えられたと。そして、新型コロナウイルス感染症は重症化の危険性だけでなく、自分が周りに感染させてしまったこと、濃厚接触者にさせてしまったことへの罪悪感を生じさせるため、患者や濃厚接触者となってしまった方へ寄り添う気持ちを忘れず、思いを受け止めていくことが保健所としての大事な仕事であると感じている、と語ってくれました。

＜保健所でのPPE着脱訓練の様子＞
（患者搬送等に関わる職員が参加）

先輩の職場は今

高知大学医学部附属病院

皆様、こんにちは。私たちは高知県立大学を卒業し、現在は高知大学医学部附属病院　第1病棟7階で働いています。私たちの働く病棟は血液内科、呼吸器・アレルギー内科です。血液疾患では、白血病、悪性リンパ腫、呼吸器・アレルギー内科では肺癌、間質性肺炎などの患者さんが多くいます。治療は、化学療法・放射線治療、輸血、移植など様々です。入院から退院後までの生活を見据えて、部署では地域連携カンファレンスが行われており、患者さんや家族の生活背景や役割を考え、他職種とともに一人一人に沿った支援ができるように取り組んでいます。

〈新人の声〉

病棟で働き始めて早1年が経とうとしています。自分のする1つ1つの行動に責任が伴うため、入職した当初は分からないことも多く、不安や恐怖ばかりでした。同じ病棟には専門性を高める先輩方が多く、そんな先輩から日々学ばせていただくことで、少しずつ成長することができています。一人前にはまだまだ程遠いですが、これから高知大学医学部附属病院で働きたいと思う後輩がいたら、一緒に学んで一緒に成長していきたいです。コロナ禍でインターンシップもなくなり、病棟の雰囲気など分からないこともあると思いますので、少しでもこの文章から第1病棟7階の魅力が伝わると嬉しいです。　（松本　愛穂さん）

日々看護師という仕事の大変さを感じています。まだまだ課題があり成長が必要ですが、患者さんにとっては自分も1人の看護師。患者さんへ安心・安全な看護を提供するための知識と技術が必要です。とくに第1病棟7階は、抗癌剤での治療が日常的に行われており、患者さんだけでなく自分や他のスタッフの安全を守るためにも「新人だから」という言い訳はできません。その点において、高知大学では病院全体や病棟ごとに様々な研修が企画されており、講義や演習を通して確実に知識や技術を習得することができました。また、先輩たちも優しく指導してくださるので、日々たくさんの学びがあります。定期的に先輩と一緒に行う振り返りでは、自分のできることが少しずつ増えていることを実感し、看護師として成長する喜びを感じました。これからも学びを積み重ね、先輩たちのような一人前の看護師になりたいと思います。　（松岡　志保さん）

（写真左から：永野裕花さん、松本愛穂さん、松岡志保さん、下出真規子さん）

兵庫県立こども病院

私は、高知女子大学家政学部看護学科を45期生として卒業後、小児看護がしたいという強い思いから、兵庫県立こども病院に就職しました。卒業して22年が経ち、その間、こども病院も須磨からポートアイランドに移転し、現在は移転5年目の新しいきれいな病院で働いています。

私が、就職して配属されたのは、主に先天性心疾患の術前から術後の循環・呼吸管理を必要とする患者さんが入室するICUでした。ICUで生後すぐから成人となった患者さんまで、急性期の看護を17年間学び実践しました。18年目に初めて一般病棟に異動になりました。1年間だけの一般病棟勤務でしたが、それまでの経験を活かしながら、さらに自宅に帰ることを意識した看護を学ぶことができました。その後は、看護師長として集中系の病棟で3年勤務しました。現在は、令和2年4月より、教育担当看護師長として、新人教育や院内の教育にかかわる仕事を行っています。

昨年度までの21年間は、たくさんのこどもとその家族に出会い、たくさんのことを学ばせていただきました。楽しいことだけでなくつらいこともたくさんありましたが、同じようにこどもが好きで、こどもと家族にとって少しでも良い看護をと常に考え、実践している同期や先輩の支えや、かわいいこども達が頑張る姿や元気になっていく姿に励まされ、癒されながら頑張ってきました。また、学生時代に学んだ、“子どもたちの頑張る力を信じそれを引き出す看護、入院や手術といった体験を乗り越え、その後の生活の中で自信や力となるように”といった言葉は、今でも自分自身、大切にしていることです。そして、小児科実習の時に受け持たせていただいた患者さんの母から最終日にいただいた“笑顔の素敵な看護師さんになってください”というメッセージが常に心にあり、高知女子大学での学びや経験が今に繋がっていると感じています。

現在は、教育担当看護師長という立場で、こどもたちや家族と直接かかわることがない日々を過ごしており、少し寂しく感じていますが、自分が今まで大切にしてきた看護、経験してきた看護を伝えていけるように頑張っていきたいと思っています。（伊丹　照美さん）

（写真左：濱田米紀さん、伊丹照美さん）

幅広い領域で活躍する修了生

池畠　真由美さん（修士17期生）
社会医療法人近森会

私は、平成28年3月に看護学研究科CNSコース（クリティカルケア看護学領域）を修了し、現在は社会医療法人近森会ICU病棟に所属しています。しばらく急性期を離れていましたが、クリティカルケア看護にやりがいを感じ管理者の経験や大学院での学びを経て、現在に至ります。

近年、医療の著しい進歩によりICUを生存退室する患者は増加しつつある一方で、長期的なQOLの低下が明らかになっており、集中治療後症候群（PICS）とよばれる身体・精神・認知機能の障害が問題となっています。また、治療により病態は安定しても、生活者として回復するためのサポートはまだまだ不十分であるといえます。看護師においても、ICU環境は、患者・家族を生活者として看る視点やケアの本質を見失いやすく、無力感につながっていることが考えられます。これらより、私はPICS予防の1つとして「ICUダイアリー」を活用して、患者の妄想的記憶の軽減、家族の適応プロセスへのサポート、看護師のケアリングの育成に取り組んでいます。そして、人ひとりの人生に関わることのできるICU看護のやりがいをスタッフと共有しています。

私がCNS活動において大切にしていることは、患者・家族を置き去りにしないこと、「I want」ではなく「We want」の姿勢で課題解決に向けて取り組むことです。大学院修了後も、CNSの高度看護実践とは・・・と自問自答する日々ですが、大学院での学びが引き出しとなりCNSとしての成長を支えてくれていると感じています。

園田　由美さん（修士８期生、博士12期生）
川崎医療福祉大学

高知女子大学大学院を修了し、慢性疾患看護専門看護師の認定を受けて13年たちました。認定を受けた頃は専門看護師の資格を持つ方が少なく、ロールモデルがいない状況でのスタートで、手探りの状態でしたが、2020年には、認定者数は230名となりました。なかには起業する専門看護師もおり、専門看護師の活動や活動の場も多様化してきています。現在私は、大学の教員と兼務で、週に1日糖尿病看護外来で、専門看護師として活動をしています。しかし、週1日ではタイムリーに関わることが難しく、実践が中心の活動となっており、兼任における活動の在り方が直近の課題となっています。

専門看護師の認定を受けた頃より、1型糖尿病の患者会の支援を行っています。1型糖尿病は、患者数が少ないことから認知度が低く、まだまだ社会では病気を理解されていないのが現状です。同じ病気をもつ患者さんが集まり、病気に関する悩みや情報の共有を行う交流の場として、患者さんが中心となって活動しています。私は、医療者の立ち場から情報提供を行い、あまり知られていない病気だからこそ患者、家族が力をつけられるよう支援を続けています。また、現在はCOVID-19の影響で活動ができていませんが、高知県糖尿病看護土佐の会に所属し、会員と共に糖尿病看護の質の向上を目指し活動しています。

これまでに経験を活かして、活動の場を拡げるとともに後輩の育成に努めていきたいと思っています。

令和2年度学位記授与式の様子

今年度は、池キャンパスで執り行われ、16名の方が修了されました。

フレッシュに活躍する卒業生

「看護師として働いて」
佐賀大学医学部附属病院
山口　央人さん（66期生）

私は佐賀大学医学部附属病院で勤務をしています。私が就職した時期は新型コロナウイルスの影響により例年とは違う１年目のスタートとなりました。入社式の翌日から病棟業務が開始となったり、研修が削減されたりと毎日必死に出勤していたのを覚えています。その中で先輩方が丁寧に指導をしてくださったおかげで、少しずつ一人で出来ることが増え、一人の看護師として自信が持てるようになりました。まだまだ足りない知識や技術はたくさんありますが、看護の難しさを実感しながらも毎日楽しく仕事をしています。１年間働いてみて「なぜ」と疑問を持つことが大切であると感じます。患者さんの言動や症状、検査データなど、一つ一つに対して疑問を持ち考え続けることがその人を理解することとなり、個別性のある看護へと繋がっていくのだなと感じました。これからもたくさんの経験を積んで、自分のやりたい看護が実践できるように初心を忘れずに頑張っていきたいと思います。

「保健師として働いて」
高知市こども未来部母子保健課
山﨑　早恵さん（66期生）

保健師として働き始めて約1年が経ちました。4月当初はわからないことだらけでしたが、先輩方に助けていただき、少しずつ仕事に慣れることができました。

仕事をしていく中で自分の無力さを痛感しますが、子育て中のお母さんに教えてもらうこともたくさんあり、日々勉強させていただいています。仕事を始めて感じるのは、関係機関との連携・協働の大切さです。お母さんとお子さんの現状を踏まえて、関係機関の役割、保健師としての自分の役割を意識して仕事をしています。お母さんとの関わりを通して、「山﨑さんがおってくれて良かった」「子どもが順調に成長していることがわかって安心した」という言葉を聞くとやりがいを感じます。

組織の中では1年目の保健師ですが、お母さんにとっては専門職であるため、責任を持った発言をするよう心がけています。辛い時には私の顔を少しでも思い出してもらえるよう、これからも頑張っていきます。

「助産師として働いて」
独立行政法人国立病院機構　高知病院
中森　未空さん（66期生）

4月から助産師として働き始めてはや1年が経とうとしています。私は高知県の二次医療機関に勤めており、切迫早産、妊娠高血圧症候群等の妊婦の看護や、産褥、新生児への看護、分娩期の産婦の看護、帝王切開児受けやオペ後の管理など様々なことを経験させて頂きました。学生の時とは違い、複数の対象者を受け持ち、業務を調整しながら対象者への看護を実践していかなければならず、一人一人に時間をかけられない状況に戸惑いや葛藤を感じていましたが、置かれた状況の中で対象者さんにとっての最善は何か常に考えながら日々取り組んでいます。まだまだわからないことばかりで不安や緊張の毎日ですが対象者さんから「娘をとりあげてくれてありがとう」というメッセージを頂いたり、赤ちゃんの誕生を一緒に泣いて抱き合って喜んだ経験が今の私の原動力となっています。対象者さんとの出会いに日々感謝しながら、その人にとっての最善の看護とは何か常に探求していく姿勢を忘れず2年目も頑張っていきたいです。

「養護教諭として働いて」
長崎市立西浦上小学校
野里　姫佳さん（66期生）

大学を卒業し、春から児童数700人越えの小学校に勤務することになりました。教育実習でしか学校現場を学ぶ機会がなかったことや、中学校勤務希望だったこともありとても不安でいっぱいでした。しかし、いざ日々の執務が始まるとそんな不安なんてすっかり忘れ、予測不可能な行動や怪我をしてくる子どもに振り回されつつもとても充実した日々を過ごしてきました。また、大規模校ということで養護教諭の複数配置を経験し、大先輩の養護教諭から、応急処置を始め子どもとの接し方などたくさんのことを学び養護教諭として日々成長しています。

今年は新型コロナウイルス感染症の影響もあり、感染症対策や消毒作業など、想像していなかった仕事が多くあり、どうしていいか不安になることもたくさんありました。このように予測困難な時代ですが、チーム学校として多くの先生に助けていただきながら対策をし、楽しく仕事をしています。これからも、子どもたちのために自分には何ができるかを考えながら成長し続けていきたいです。

看護学部は今

コロナ禍での全学生に対する生活支援活動

2020年のクリスマスは誰にとっても思い出に残るものでした。当時の高知は、流行第四波の真っただ中にあり、いつ自分が感染者になるか、という不安と隣り合わせの毎日でした。例年であればその後にやってくる冬休みをウキウキしながら迎えていた人も、休みの間いったいどうやって生活するのかと考えると、うかれてばかりいられなかったと思います。とりわけ学生は、その前からバイトもできず、貯えもなく、学校から届くものといえば、「あれはダメ・これはダメ」「あれをしろ・これをしろ」という指示メールばかりで、さぞかしウンザリしていたと思います。それでも気丈に、「実家にはおじいちゃんおばあちゃんがいるから」と、帰省をあきらめた学生に対して、表向きは「何かあったらいつでも相談してくださいね」と言いつつ、暦どおりに大学が冬休みに入ってしまったら、彼らは一体どんな気持ちで正月を迎えることになるのかと思うと、一人の教員として切ない気持ちになりました。そこで、同じように何かできないかと考えていた教職員と有志で始めたのが「コロナサポート活動（ころサポ）」です。

ころサポは、以下3つの趣旨で活動を行いました。

- 年末年始の帰省、飲み会、会食、バイトをあきらめて孤独に生活している本学学生を物心両面で元気づける
- 濃厚接触者、健康観察期間にあるものが外出することなく、安心して療養期間を完遂できるように支援する
- COVID-19感染拡大の影響で、困難になっている横のつながり、支え合う仕組みをつくる

活動で心がけたのは、自粛生活を続ける学生を「目に見える形で」支援することです。物資の配布や、オンラインミーティングで他愛もない会話を楽しむ機会を提供することで、不要不急の外出の頻度を減らし、感染拡大を予防することができないかと考えました。一方で、学生のプライバシーを守るため、支援活動は本学の教職員有志のみで行いました。

ころサポは、全学生に対する活動開始の周知後、万一の場合に備えた事前登録を含めて、多くの学生から反応がありました。このうち、支援を希望する学生に対しては、食品や日用品の配布（のべ16件）、オンラインミーティングの開催（のべ15名が参加）を年末年始も休まず実施しました。活動は当初、冬休みだけの予定でしたが、今年度の医療福祉系の国家試験が「感染者は受験不可、再試験なし」という大変厳しい条件の中で実施されることになったため、令和3年2月にも要望調査を実施し、追加の物資配布を行いました。

活動は多くの方々からの協力を得て実施することができました。メンバーには、永国寺、池キャンパス全学部から10数名の教職員が参加しました。支援物資は、教職員だけでなく、大学院生や企業からも集まりました。学生一人に両手で抱えるほどの物資を配布しましたが、それでも余るほどでした。活動期間終了後に余った物資は、3月以降も引き続き困っている学生一人ひとりに届くように、学生・就職支援課に引き継いでいただきました。

ころサポの活動で印象的であったのは、支援を受けた学生から、感謝の言葉とともに、他の学生に対する思いやりや、活動にかかわる教職員に対するねぎらいの言葉をもらうことがあったことです。これは、ころサポの活動がもたらした、単なる一方的な経済支援の域を超えた成果なのではないかと思っています。

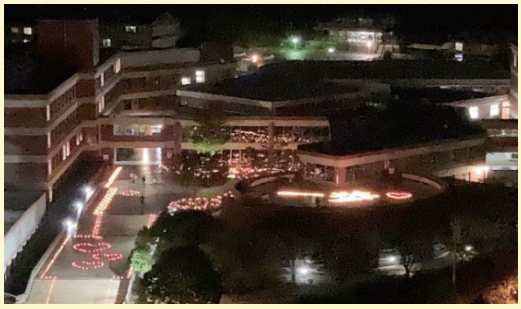
本活動に際し、温かい励ましとご協力を賜り、この場を借りまして心からお礼申し上げます。（災害看護学　木下　真里）

看護学部は今

紅葉祭

看護学部　2回生　吉田　裕莉華さん

今年度の「紅葉祭」の一環として、高校生座談会というものを開催しました。高知県立大学に興味を持ってくれている高校生を対象に、ZOOMで学校の説明をしたり高校生の質問に答えたりしていこうという企画です。事前に高校生からの質問を募集し、1時間の前半は大学全体に向けられた質問に答え、後半は学部ごとに分かれて相談を受け付けていく、という流れでした。企画のメンバーとしては、各学部の1、2回生を中心に活動し私は看護学部2回生として同じ2回生の子と1回生の子と一緒に3人で、看護学部に興味を持ってくれた高校生と交流しました。幹部の方や先生方がたくさん準備してくださっていましたが、やはり大人数でのZOOMとなるとなかなか円滑に進めることが難しく、何人かの高校生がルームに入れないなどのトラブルも一時発生しました。なんとか解決して看護学部のコーナーに分かれた後は、高校生がきちんと音声が聞こえているかこまめに反応を確認したり、メモを取る高校生のために少しゆっくり目に話したり、大学生活を楽しみに感じてもらえるようできる限り自然体で学生同士の会話を届けたりという工夫をしました。終了後は参加してくれた高校生から多くの感謝の言葉をいただいたようで、このような状況ではありますが高知県立大学を未来の学生に知ってもらうお手伝いができたのかなと嬉しく感じました！



2020年度・紅葉祭で実施された
キャンドルアート

UOK手話サークルについて

部長　看護学部　1回生　徳永　旭さん

UOK手話サークルは今年度新しく立ち上げ、コロナウイルスの影響がありましたが、11月から活動を開始しています。このサークルでは、看護学部生を中心に、聴覚障がい者の理解を深めながら、大学卒業後に現場でコミュニケーション方法として使える日常会話程度の手話を身につける・症状や薬について簡単に説明できる程度の専門的な手話を身につけることを目標としています。

今年度はコロナウイルスの影響により、週に1度のサークルを開催することが困難ではありましたが、SNSを用いて手話に関係する情報を発信し、手話を身近に感じてもらう工夫を取っています。

私がこの高知県で8年前から聴覚障がい者の方と関わる中で、当事者から聞いた音のない世界・理解の無さ・生活での困ることや不安をサークル内で伝え、理解の輪を広げていきたいと考えています。聴覚障がい者の方に日常生活で困っていることについて聞くと、必ず医療現場で「自分の病気について理解できなかった」「薬の飲み方が分からない」といった話を聞きます。

これは、医療の専門知識を持った手話通訳者が高知県のみならず、全国的に少ないという現状を表しています。この現状を少しでも改善するために、サークルで看護学生の間に手話を知り、技術を身につけ、現場に出ても手話を学び続けるきっかけになるよう取り組んでいきたいと考えています。

手話は「言語」です。そのため、話せるようになるためには技術が必要となり、習得するまでに時間がかかります。しかし、手話はぎこちなくても構いません。聴覚障がい者について理解を深めることで、一人一人ができるサポートは大きくあります。来年度は聴覚障がい者の方を実際に学校に招き、話を伺い、自分達が身につけた手話を表現し、相手に伝わる喜びを体感し、多くの手話の魅力を一緒に発見していきたいと思います。

温故知新　その11

看護学重点シリーズ
小林冨美栄監修
金芳堂（1980･81）　全7巻

（写真にない第7巻は母性看護学です）

※小林冨美栄先生（コトバンク参照）

大正10年生まれ、聖路加女子専門学校卒、厚生省勤務、東京女子医大付属看護短大教授を経て千葉大教授。昭和46年日本看護協会会長。昭和48年ICN理事。平成19年逝去

看護学重点シリーズは、1980年以前に発行されていた「医師による医師のための看護」について書かれた教科書ではなく、日本で初めて「看護職による看護職のための看護」の教科書であると言われています。小林冨美栄先生の監修者序文の一部を紹介します。

「看護が疾病の治療に際し、医師の補助的な立場で、手技の操作を主体とした職務から、疾病をもった人間としての患者を知り、病気と患者に対応する立場から看護業務を行い、さらに、看護対象を地域社会で日常生活をしている人としてとらえ、その人および人々の健康上の問題を解決するために役立つ専門的なはたらきの提供者として、保健医療分野の他の専門家及び一般市民らとの提携で、保健医療の総合的視点による看護の役割の展開を必要とされてる今日の位置づけを看護は持っているのである。」

「本講座は高知県立女子大学衛生看護学科の卒業生が中心になって作成した。当大学はわが国で最初の看護大学として昭和27年4月に創設され、その卒業生は25年余の年月の間に、わが国の看護界において看護の実務者、教育者として先導的役割を果たしてきている。私事ながら、その創設期に当時の仕事の立場上関わりをもち、また、直接に学生と学び会う年月を過ごし、さらに卒業生から看護の仲間として多大の協力を得ている私は、浅学でその任にたえるものでないことを知りつつも、畏友、和井兼尾名誉教授の勇気ある長年のご功績をたたえたい気持ちを持ってして監修の役を務めさせていただいた」

手元にあります6巻の著者は以下の通りです（敬称略）。

看護学重点シリーズ	著者名（表記順）
1. 看護学総論	山﨑美恵子、南裕子、松本女里、岡部聡子、中桐佐智子、宮内美紀子
2. 公衆衛生･社会福祉	中島紀恵子、松本女里、久常節子
3. 成人看護学Ⅰ	岡部聡子、池川清子、松本女里、島内節、明神啓子、南裕子
4. 成人看護学Ⅱ	岡部聡子、高橋章子、池谷妙子、大名門裕子、多田敏子
5. 精神看護学	南裕子、梶原和歌、中山洋子、野嶋佐由美
6. 小児看護学	山﨑智子、渡部乙恵、山﨑美恵子

4年制大学の看護科として、聖路加看護大学が1964年、千葉大看護学部が1975年から教育を開始しています。それに先駆けて1952年からの大学教育を受けてこられた先輩方だからこそ、1980年に看護学の教科書を執筆･編纂できたことは素晴らしいと思いますが、たいへんなことも多かったのではないかとお察しします。（次回以降、内容についてもご紹介したいです）

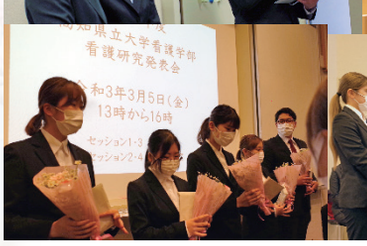
ご寄付をいただいた方

福岡　恵美子様（5期生）
山田　薫様（26期生）
田中　芙美江様（15期生）
津島　ひろ江様（14期生）
山﨑　登代子様（17期生）
岩田　禮子様（10期生）
西山　純子様（34期生）
梶原　和歌様（10期生）　他2名、の方

左記の皆様より寄付をいただきました。誠にありがとうございました。
（敬称略　令和3年3月5日現在）

令和2年度　高知県立大学看護学部
学生の看護研究発表会

令和2年度　高知県立大学看護学研究科
博士前期課程、博士課程の院生の修士論文発表会



令和2年度は、感染対策をとり、高知県立大学看護学部看護研究発表会、看護学研究科修士論文発表会が行われました。看護学生、大学院生にとって学位論文発表会、看護研究発表会は、それぞれの看護の問いを探求し、大学生活、大学院生活の集大成である取り組んできた成果を発表する貴重な機会となりました。

寄付のお願い

同窓会への寄付のご協力をよろしくお願いいたします。
寄付金は、同封の振込用紙にてお願いします。ホームページでもご覧いただけます。
ご不明な点はいつでもお問い合わせください。

編集後記

高知県立大学池キャンパスにある花々は新入生を迎えるように見頃を迎えています。同窓会会報も皆様方のご支援・ご協力のおかげで第22号を発刊することができました。

昨年から世界で猛威を振るい、私たちの生活を一変させるような状況となりました。本号では、そのコロナ禍において、ご活躍されている先輩方、修了生・卒業生そして、学部生からメッセージをいただきました。先輩方、同窓生からのメッセージの編集を通して何より私たちがパワーをもらっております。同窓生の皆様に、手に取ってお読みいただけたら幸いです。

（池添・川本・西内）

事務局

〒781-8515　高知市池2751-1　高知県立大学看護学部
Fax：088-847-8750

ホームページアドレス

高知県立大学
http://www.u-kochi.ac.jp/

高知県立大学看護学部
http://www. u-kochi.ac.jp/~kango/